

【3】 公立高校 入試の仕組み

1. 出願可能地域

- (1) 千葉市は第1学区です。隣接学区も受けられますから、受験可能学区は第1・第2・第4・第6・第7・第9と非常に広範囲になります。ただし、専門学科は学区の枠がなく全県から受験できます。

学区	所在市町村	所在高校					
1	千葉市	千葉	千葉東	市立千葉	市立稲毛	千葉女子	幕張総合
		千葉西	検見川	千葉南	千葉北	磯辺	千城台
		土気	若松	柏井	犢橋	生浜	泉
2	船橋市・習志野市	船橋	薬園台	船橋東	船橋啓明	船橋芝山	
	八千代市・市川市	船橋二和	船橋北	船橋古和釜	船橋豊富	船橋法典	*市立船橋
	浦安市・松戸市	津田沼	市立習志野	実籾			
		八千代	八千代東	八千代西			
		国府台	国分				
4	佐倉市・成田市	佐倉	佐倉西	佐倉南	佐倉東		
	四街道市・八街市	四街道	四街道北				
	印西市・印旛郡	成田国際					
6	東金市・山武郡						
7	茂原市・勝浦市	長生					
	長生群・夷隅群						
9	市原市・木更津市	木更津	市原八幡				
	君津・富津・袖ヶ浦						

- (2) 幕張総合高校・千葉女子高校および専門学科、総合学科、定時制には学区制限はありません。

- (3) 市立系は市が運営しているので、普通科は原則として市内在住の生徒しか受験できません。したがって、市立船橋の普通科は千葉市からは受験できません。ただし、(2) で述べたように専門学科は県内全域から受験できますので、市立船橋も商業科と体育科は千葉市からも受験できます。

市立系としては例外的に市立習志野の普通科は、千葉市からも受験できます。ただし、習志野市内生を20%程度まで優先入学させるため（前期のみ）、他市からの受験生の前期入試の合格点は高くなるようです。

- (3) 生浜高校は、全日制と三部制の2つのコースがあります。三部制は、さらに午前部・午後部・夜間部の3つのコースに分かれます。

「相互履修」と言っても、全日制の生徒が三部制の授業を、三部制の生徒が全日制の授業を受けることもできます。また、「他部履修」と言っても、午前部の生徒が午後部の授業を、午後部の生徒が午前部の授業を受けることも可能です。

相互履修・他部履修により、三部制であっても3年間で卒業することができます。三部制で3年間で卒業するほうが、全日制で卒業するよりも授業料は安くなります。

卒業証書に「全日制」「三部制」の記載はありません。

- (4) 国立木更津高専は県立・市立高校との併願が可能です。ただ、第一志望者が圧倒的に有利ですし、性格上、第一志望で受ける高校でしょう。したがって、県立・市立・私立高校が滑り止めとなります。木更津高専は第一志望だと幕張総合から市立千葉レベル、第二志望だと千葉東レベルです。

2. 平成26年度 公立高校入試日程

項目	前期選抜	後期選抜	二次募集
出願	2月3日・4日	2月21日・24日正午	3月10日・11日正午
出願変更	なし	2月25日・26日正午	3月12日
学力検査	2月12日・13日	2月28日	3月14日
合格発表	2月19日	3月6日	3月18日

3. 前期選抜と後期選抜の相違点

- ①学力検査を、前期選抜では2日、後期選抜では1日で実施する。

前期選抜は1教科50分テスト、後期選抜は1教科40分テスト。

- ②募集人員の割合は、前期選抜の方が高い。(全体の約63.5%を前期で募集)

普通科：募集定員の30%～60% 専門及び総合学科：募集定員の50%～80%

※ ほとんどの普通科が60%、ほとんどの専門学科が80%

- ③前期選抜においては「各学校独自の検査」を実施する。

- ④選抜基準及び方法が異なる。

前期選抜は、各学校独自の選抜基準・方法により合否を決定する。

後期選抜は、「実施要項」に定められた(全ての学校で同じ)基準・方法で選抜する。

4. 前期選抜

H23 年度から、従来の特色化選抜に変わり、「前期選抜」が始まりました。従来の特色化入試では、幕張総合・市立習志野・千葉商業・柏井などの高校で、学力検査なしの入試が行われていました。ところが、前期選抜においては、すべての高校で5教科の学力検査を実施しなければなりません。

ただ、前期選抜は特色化入試の理念も継承しています。つまり、各高校の特色ある学校づくりを進めるため、学力だけではなく、「生徒の多様な能力・適正・意欲・努力の成果・活動経験の優れた面を多元的に評価する」
ことになっています。そして、入試における合否の選抜方法は各高校に任せられています。

(1) 選抜枠

前期選抜の募集枠は、普通科は<30%以上 60%以内>、専門学科・総合学科は<50%以上 80%以内>と定められています。ただし、本年度の普通科は、関宿(中高連携校)を除く全ての高校で60%と、枠いっぱい設定していました。

また、本年度の専門学科は、普通科の色彩の強い理数科・英語科(国際教養科)などでは60%などに行っているところもありましたが、商業科・工業科などではほとんど枠いっぱいの80%に設定していました。

60%—船橋(理数)、市立千葉(理数)
75%—市立稲毛(国際教養)
80%—上記以外の専門学科及び総合学科

※ 以前は、クラス数だけ割増合格者を出すことが認められていました。しかし、前期選抜では、このような割増合格は認められていません。

(2) 検査内容

1) 1日目の検査内容

5教科の学力検査が行われます。1教科50分、各教科100点満点です。試験内容は従来の一般入試と同様のものです。

2) 2日目の検査内容

「面接・自己表現・作文・適性検査・学校独自問題から1つ以上の検査を実施すること」とされています。実施する検査については、各高校が決めます。今年度、各高校が2日目に実施した検査内容は、データ集p7～12をご覧ください。

*各検査の概略

○面接：学習活動や学校生活に対する意欲・関心、あるいは一般常識を問う。

検査官 2～3 人に受験生 5～6 人の集団面接の形で行われるのが一般的です。時間は 10～15 分。
ただし、幕張総合・看護科は個人面接。

○集団討論：複数の受験者に、同一のテーマを与えて自由に討論させる。

今年度、集団討論を行った高校はありませんでした。

○自己表現：決められた時間内に、受験者があらかじめ提出したテーマに従って発表する。

運動系は実技による自己表現、その他はプレゼンテーションによる自己表現が一般的

○作文：指示された題名のもとに文書を作成する。

○小論文：ある文章を与え、その全体又は一部について問い、受験者のものの考え方等を見る。

○適性検査：学校・学科の特色に応じて行う実技等の検査で、運動能力に関する検査、各学校が指定する検査等を行う。

○学校独自問題：高校が独自に作成し、受験者に課す筆記試験。

千葉東が<英・数 2 科の応用。計 100 点>、市立稲毛が<英・数 2 科の基礎。計 200 点>

○その他の検査（集団適性検査）：集団に課題を与えて活動を観察する検査。

（3）調査書の補正（前期・後期選抜とも調査書の補正が行われます。）

調査書の評定については、次の<算式 1>で算出した数値を、選抜の資料とします。

算式 1 ⇒ 「 $X + \alpha - m$ 」

X = 個人の評定合計値（調査書の 3 年間の合計値。135 点満点）

α = 評定合計標準値（県が定める。当面は $\alpha = 95$ とする）

m = 各中学校の第 3 学年の評定の合計値の平均値

評定値のつけ方は中学校間で非常に幅があります。23 年度ですと、評定合計平均値が最も高い中学で 106、最も低い中学で 83 でした。その差は 23 です。つまり、補正をかけないままだと、厳しい評定をつける中学の生徒は、入試を受ける前から 23 点のハンディを背負っているというわけです。

そこで H20 年度入試より、各中学校間のばらつきがないようにするために、上記の換算式を用いて数値を修正するようになりました。

たとえば、今春の入試における 9 科目 3 年間合計の評定平均は、花中 97、朝中 93 でした。したがって、花中では $X + 95 - 97 = X - 2$ となっており、花中の生徒全員が 2 点減点されました。一方、朝中では $X + 95 - 93 = X + 2$ となっており、朝中の生徒は全員 2 点が加算されました。

つまり、<各生徒の評定値が、在籍中学の評定平均が 95 より高ければその分だけ減点され、95 より低ければその分だけ加算される>という仕組みです。

※ 補正の導入にともなって、各中学の通信簿のつけ方がきびし目になりました。ただ、公立入試では抑え目の評定の方が有利ですが、私立の推薦基準をクリアするには甘めの評定の方が有利なわけです。

そこで、各中学は<1～2 年の評定を辛くし、3 年の評定を甘くして、3 年間のトータルでは 95 にする>ように工夫してきているようです。なかなか難しい作業のようですが。

	5	4	3	2	1
相対評価	7%	24%	38%	24%	7%
絶対評価 (H23を例にして)	18.4%	29%	38.6%	10.8%	3.3%

(4) 選抜方法

詳細は各校で異なりますが、大きく分けると下記のような数種類のタイプがあります。

<A> <学力検査の得点+評定値>で順位づけをする方法

面接等の2日目の検査は参考資料とする(ABCの3段階評価をし、Cの場合は審議の対象にするなど)。

[学校例] 県立千葉、県立船橋、薬園台・普、八千代、千葉女子・普、千葉北、千葉商業 など

※ 前期選抜では選抜方法が各高校に任されているため、評定値を拡大したり縮小したりする高校もあります。

千城台、四街道北は2倍に(普段の姿勢を重視)。

県立船橋は0.5倍、千葉東は0.4倍、八千代は0.7倍(平常点よりも、学力を重視)

また、教科の135点満点のほかに特別活動の記録などを点数化して加算する高校もあります。

(データ集 p7~12)

 <学力検査の得点+評定値+2日目の検査の得点>で順位づけをする方法

[学校例] 千葉東、市立稲毛、津田沼、千葉女子・家、千葉工業、柏井、犢橋など

[2日目の検査の配点] (データ集 p7~12)

<C> 後期選抜に準じた選抜方法

学力検査と評定のそれぞれを順位づけし、いずれも一定の順位以内(一般には80%、市立千葉は70%以内)にいる者をA組として内定とします。残りの人員は、A組以外から総合的に選抜していきます。

[学校例] 市立千葉、市立稲毛、千葉西、磯辺、実籾な

※ 市立稲毛は、2日目の得点を加算したうえで、<C>の方法で選抜します。

<D> 2日目の検査結果等を優先する選抜方法

2日目の検査結果や特別活動実績など、学力検査や評定以外の内容が優れたものから順に並べ、選抜していきます。

たとえば、市立習志野では、まず特別活動の実績、面接・自己表現で高い評価の者を絞り込み、その中で学力検査および評定の合計点で順位をつけ、予定人員の80%までを内定とします。その後、学力検査および評定の合計点で順位をつけ、残りの内定者を決めます。

<E> その他特殊な選抜方法

検見川高校は学力検査の得点順位が予定人員の150%以内にある者のうち、特別活動(部活動や生徒会等)の記録等の評価点により、まず予定人員の約3分の1までを内定とします。残りは、学力検査の得点+評定合計値の総合計により順位をつけ、作文や面接の評価等を資料に、総合的に判定します。特色化入試の色彩が濃い選抜方法です。

幕張総合高校は、学力検査の成績が上位の者、および自己表現(ABC3段階評価)の成績がA評価の者について、学力検査の得点および評定合計値の総合計により順位をつけ、調査書および志願理由書等の記載内容を資料とし、特に問題のないものから入学候補者を内定する。

上記で決まらなかった者については、学力検査の得点および評定合計値の総合計により順位をつけ、各資料

の内容等に特に問題のないものから入学許可候補者内定者とする。

4. 後期選抜

(1) 募集人員

後期の募集人員は、全募集定員から「前期選抜」における合格数を引いた人数となります。

後期では、多少割増合格が行われています。今年は、県立千葉+7、千葉東+4、市立千葉・普+6、市立稲毛+3、幕張総合・普+9、検見川+2、千葉北+8、磯辺+6、千葉商業+7、柏井+6など。

(2) 検査内容

1) 1日で行われ、5教科の学力検査が課せられます。1教科40分で、前期選抜と同レベルの問題が出題されます。配点は各教科100点満点です。

2) 学力検査以外に、面接等を実施する高校が多くあります。

今年、2日目に面接を実施しなかった近隣の高校は<県立千葉・県立船橋・千葉東・佐倉・薬園台(普)・市立千葉・八千代(普)・市立稲毛・幕張総合・千葉女子(普)・津田沼・千葉北など>でした。ほとんど上位校ですね。その他の高校では実施しています。

面接を行う多くの学校は、A・B・C3段階評価かA・B2段階評価です。

3) 傾斜配点

理数科や国際科・英語科には傾斜配点があります。理数科でしたら<数学・理科>の得点を1.5倍または2倍、国際科・英語科なら<英語>の得点を1.5倍または2倍するといったものです。試験内容は普通科と同じです。

県立船橋・理数科と市立千葉の理数科： 理科・数学を1.5倍、
市立稲毛の国際教養科： 英語を1.5倍、

※ 船橋・理数科は前期も傾斜配点がありますが、その他は、前期では傾斜配点を行いません。

(3) 選抜方法

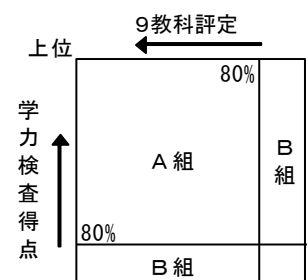
「5教科の学力検査の成績」、「面接等を実施した高校はその結果」、「調査書(前期選抜同様、補正をかけたもの)」等から、各高校が総合的に判定して可否を決めます。

① 次のア～ウの条件に合う者をA組とし、合格とします。

ア 中1・中2・中3の調査書(5段階評価)の9科合計(135点満点)によって順位をつけたとき、次の(a)(b)に示す%以内にあること。

(a) 受験者数が募集定員以内のときは受験者数の80%

(b) 受験者数が募集定員を超えるときは募集定員の80%



(要するに、少ない方の80%以内ということです)

イ 入試の総得点によって順位をつけたとき、上の%以内にあること。

ウ 調査書の記載内容、個々の教科の入試得点、第2日に実施した検査の結果等に特に問題の無いこと。

② A組に属さない者をB組とし、次の算式によって求めた数値、調査書中の記載事項、および2日目の検査の結果をもとにして総合的に判定します。

$$\text{算式2} \Rightarrow Y + KZ$$

Y = 学力検査の5教科の得点合計

K = 1以上の整数。 ※ ほとんどの高校が1ですが、泉・四街道北はK=2、若松はK=3です。

Z = 算式1 (p14参照) で求めた数値 (補正をかけた評定値)

従って、入試で350点、内申がオール3 (計27) のB組の生徒が、K=1の学校を受けたときの持ち点は $<350 + 1 \times (27 \times 3) = 350 + 81 = 431 \text{ 点}>$ となります。これを高い順に並べて合否を決めます。

この際、「出欠の記録」「健康診断の記録」「行動の記録」「特別活動の記録」等も資料とされます。なお、欠席日数が30日以上の場合、自己申告書 (p26資料1-3) を志願高校に提出できます。

(4) 内申点による逆転現象

内申点による逆転現象ということがあります。次の事例で内申点がどのような影響を及ぼすか見てみましょう。

	入試得点	内申点	総合得点
P君	345点	オール4 (108)	453点
Q君	365点	オール3 (81)	446点

2人の総合得点は上記のようになり、入試得点で20点上回っていたQ君が、総合得点ではP君に負けてしまいます。

このように、内申点で20点くらいの逆転現象は容易に起きます。実際、今年の佐倉高校・後期で<学検点413点、内申95点、中学校平均104点>の生徒は合計499点で不合格、<学検点393点、内申124点、中学校平均92点>の生徒は合計518点で合格しています。学検点の20点差が、内申点でひっくり返ってしまったわけです。

内申は大きいです。定期テストの点数の割に5段階評価が悪い生徒は、何とか上げるように努めましょう。

(5) 「審議の対象」

公立高校では、『入学者選抜の選抜・評価方法』というものを公表しています。その中で「審議の対象」という項目があります。

<評定に関連して>

1がある	県立船橋、薬園台(3年次)、幕張総合、千葉西、千葉南、千葉女子、磯辺、千葉商業、千葉工業、若松(3年次)、柏井、実籾、京葉工業、犢橋、四街道北、泉
2がある	佐倉、市立千葉
1がある、または2が複数ある	千葉北
規定以下の教科がある	市立習志野

<入試得点に関連して>

市立千葉・普	40点以下の教科がある場合(前・後期とも)
市立千葉・理数	国語・社会・理科が40点以下、数学・理科が傾斜配点后75点以下(後期)
実籾	各科目の点数が20点未満(前・後期とも)
千葉工業	各教科の得点の内15点以下がある場合(前・後期とも)

<出欠の記録に関連して>

3年間	10日	幕張総合(看護)
	30日	県立船橋、市立習志野、柏井、四街道北、泉
	40日	千葉商業
	60日	県立千葉
各学年	15日	市立千葉
	20日	幕張総合(普通)、千葉西、千葉女子、千葉商業、若松、柏井、実籾、犢橋
	30日	佐倉、薬園台、千葉南、津田沼、磯辺
3年次	10日	県立船橋
	20日	市立習志野

<行動の記録に関連して>

〇が1つも無い	八千代、実籾、生浜
1つ以下	千葉商業、四街道北
2つ以下	千葉女子、泉
極めて少ない	磯辺

「審議の対象」は即不合格を意味しているものではありません。 審議の対象となるのは、ボーダーライン上にある受験生です。各高校によって異なるでしょうが、ある高校の先生は「大体1~10名程度だ」とおっしゃっていました。対象となる受験生に対しては、上から順に一人ずつ、学検点・内申点・特記事項などを見ながら審議をするそうです。審議の対象の中でも、合格者はいるとのことでした。